



瀬戸 麗（社会学）

「イミズスタン」カレーの謎

射水市の周辺をドライブしていると、簡素な店構えのカレー屋を目にすることがある。はじめ少しためらいながら入店すると、スパイスの香りとともにボリュームたっぷりのカレーが運ばれてくる――。

このようなパキスタン系のカレー屋が点在する高岡市、射水市、富山市の圏域は、「イミズスタン」と呼ばれている。射水市の“イミズ”とペルシア語で「～の国、～の多いところ」を意味する“スタン”の合成語である。2015 年にカレーブロガーの大江春泥氏によって名づけられたという。射水市に現存する最古の「イミズスタン」カレーのお店は2002 年に国道 8 号沿いに開店した「カシミール」だそう¹⁾。

私は、今回マンスリーコラムを執筆するにあたり、パキスタンの人たちが、なぜ日本に、そして射水市近郊にやってきたのかを、まずは既存の文献を手掛かりに紐解いていきたいと考えた。

澤によると、パキスタン人の日本出稼ぎブームが起きたのは、1980 年代後半である。当時、日本が好景気で労働市場における人手不足が深刻化していたこと、さらに円高傾向の継続によって日本とアジア諸国との賃金格差が拡大していたことが、国際経済学的にみた大きな背景である。また、移住を水路づけた法制度上の背景として、日本とパキスタンが 1961 年から「査証相互免除取り決め」を結び、長期的に経済的互惠関係を築いてきたこともある。しかし、日本は「査証相互免除取り決め」を 1989 年 1 月に停止するとともに、1990 年の入管法改定をめぐる一連の議論の中で、アジア系外国人ではなく、ブラジルやペルーなどの日系人を優先的に受け入れることとなった²⁾。そのようななか、一部のパキスタン人は、当初の工場労働を離れ、別の道――日本人配偶者を巻き込みながらエスニック・ビジネスを展開する方策――へと転じていった³⁾。

福田によると、1990 年代以降、もともと関東地方に在住していたパキスタン人が、富山にロシア向け中古車貿易のビジネスチャンスを見出し、家族とともに移住するようになった。そして、射水市新湊地区の富山新港とその周辺の国道 8 号線沿いに、ロシア向け中古車貿易業者が集積するようになった。しかし、2008 年のリーマン・ショックや 2009 年 1 月のロシアによる関税引き上げの影響を受けて、ロシア向け貿易は急激に縮小してしまう。多くの業者が店舗を閉鎖した一方で、一部の業者は小規模な事務所と郊外の在庫保管スペースを確保する形で経営を維持したとされる³⁾。

そして――この頃、同朋のムスリムに出していたハラール料理を日本人にも提供する、レストラン経営に着目する人々が出てきたという。例えば、冒頭に紹介した「カシミール」も当初



高岡市の「ザイカ・カレーハウス」

はパキスタンの人に向けた店だったらしく、ブレハブの店構えをしている¹⁾。以上のような背景のもとで「イミズスタン」カレーははじまり、その後、人気が広まっていったのである。時代や政策のあおりを受けながらも、ビジネスの形を変えながら挑戦していくパキスタンの人たちの姿に学びながら、このコラムを閉じたい。

〈引用文献〉

- 1) Shundei Ooe & iNSPIB 編集部 (2022). 『おいしいイミズスタン』 iNSPIB 特別号.
- 2) 澤宗則 (2024). 「在日バングラデシュ人の集住地『リトルダッカ』の形成—東京都北区東十条・十条を事例に—」『移民研究』 20, 1-46.
- 3) 福田友子 (2020). 「パキスタン人——エスニック・ビジネスの確立と定住」 小林真生 編著『変容する移民コミュニティ——時間・空間・階層』 (pp. 88-95). 明石書店.